

当院のオピオイド使用動向

嶋崎 裕子

【目的】

疼痛コントロールは緩和ケアにとって重要であり、かつ切れ目のない質の高いケアを行う事がキーになる。そこで今回当院における H21~H25 の 5 年間で処方されたオピオイド使用の特徴を外来と入院で比較検討した。

【方法】 実施期間 H21.01.01~H25.12.31

1. 麻薬が処方された患者を年度別で抽出する。
2. 抽出後入院・外来に分別し、さらに薬剤毎に分類する。

【結果】

全症例は、249 症例。入院患者が 190 症例で在宅患者は 59 症例であった。入院時に処方された内服薬、貼付剤、注射剤はそれぞれ 41 症例、49 症例、45 症例であった。一方外来で処方されたオピオイドはオキシコンチン徐放錠が 18 症例であった。貼付剤、注射剤はともに 9 症例であった。レスキューに使用される坐薬の割合は、外来では少なかった。

【考察】

入院中は、24 時間疼痛管理が可能であるため薬剤の剤形に大きな差はなかった。一方在宅では、内服薬の症例が多く、レスキューも同様に内服が多かった。患者の疼痛コントロールは、緩和ケアにおいて、QOL に大きく関わってくる。また、疼痛コントロールをいかに行うかで、患者が望む環境で過ごせるかどうかが決まってくる。当院では訪問診療だけでなく、訪問看護や訪問薬剤指導を行うことにより、複数の職種が連携して疼痛管理に関わっている。今回のオピオイド使用動向の特徴を生かし、しっかりとした疼痛コントロールが在宅でも出来れば、緩和ケアはさらに良好なものとなる。